

どれみなのはなし

そのじゅっぺん



もくじ

まえがき

とびらのむじつに…………… 3

はじめまして、もしくは、おひさしぶりです。

一年半ぶりのコミケ。酒処金井亭二回目のどれみスペースになります。どうせならコミケでやりたいと言っていたのですが、まだ愛とネタはありますので、もう少し続けて行きたいと思います。——と、言いつつ「じゅってんご」。精進が必要ですね。はい。

さて、毎回書いておりますが、あいかわらずの恥ずかしい嘶です。苦手な方は、このまま本を閉じることをお勧めします。

準備はよろしいですか？

それでは『どれみなはなし』そのじゅってんご。しばらくの間お付き合ってくださいませ。

イラストレーション……久遠一海

酒処金井亭亭主

猫好敬白

とびらのむこうに

コートにマフラー巻いてても、立ち止まるときゅうつつ、と寒い、冬の朝。わたしは学校と逆のほうに歩いてた。

なんども通った坂を歩いてくと、道路から一段低くなったところに、古いお店が見える。赤い朝日の中に、ぼつ、と浮かぶみたい。

もう、看板もなにもなくなっちゃったけど。

「ふう」

息をはいたら、メガネがまっ白くなっちゃった。

コートをちよつとめくって、スカートのポケットを探ったら、なにかに当たった。取り出した手の中には、ハンカチに包まれた、ちっちゃくて硬いもの。わたしはメガネを拭いて、よく見てみた。なんて見てもおんなじなんだけど。見るたびに思い出すわ。金色のカギ。ももちゃんがアメリカに行く日、ゆ

き先生にお願ひして、みんなでもらったMAHO堂の合いカギ。

ゆき先生、しょうがないわね、って顔してた。『ほんとは閉じなきゃいけないんだけど』って言いながら。思い出すと、いまでもつい笑っちゃう。

合いカギで開けたMAHO堂は、あいかわらずがらーんとした。

魔法がかかっているのかしら？ いつ来てもイスやテーブルにはこりはついてない。でも、それでかえって寂しい感じになってるわ。

もつと奥に行ってみる。カギのかかったとびら。ポケットの金のカギでは開かないとびら。むかしは、ここから魔女界に行ったんだわ。いまでは、もう開かないのだけ。

わたしはカバンをわきに置いて、ゆかにすわっちゃう。とびらにもたれて目をつむると、向こうの気配が伝わってくる気がするの。

しん、としたMAHO堂だけど、ちっとも怖くない。もうじき来てくれるの、わかっているから。

コンコン

しばらくしたら、背中の方から音が聞こえてきた。

「Hello おーい、いるよ?」

ちよつと、まのびした声。

「いるわよ」

わたしはちよつと背筋のばして、も一度とびらにもたれた。

「あ、はづきちゃん。Mornin」

とびらの向こうは、アメリカのMAHO堂。このあいだハナちゃんが一度つなげちゃってから、ずつとそのままになってるみたい。

開けることはできないけれど、でも、電話よりずっと近くに感じられるわ。

「こんにちは、ももちゃん。ニューヨークって、いま夕方だったわよね?」

「夏ならネ。冬だから、もう夜だよ」

背中があつたかくなってきた。ももちゃんも、とびらにもたれてるのかしら?」

あら? ももちゃん、ふう、って息ついてるわ。

ああ、そっか。

「今日も、クリスマススの準備?」

「うん♡ あと四日もんネ」

そっか。アメリカはクリスマス休暇のほつが長いんだつたわ。ももちゃんの学校、もうお休みなのね。

「わたしの方は、イブまで授業なの」

そつじゃなかったら、もっと遅い時間でも来られるのね。

「そっかア それデ、きのうの話、結局どつなつたノ?」

あ、そうね、やっぱり訊かれるわよね。うん。

カレン女学院の、クリスマス・パーティ。

12月25日のパーティには、みんな一人づつ、男性と一緒に参加する決まりになってる。なんか変だけど、むかしからそういう規則なんだって。

木曜日に風邪で休んでいたら説明があつたみたいで、わたしがそれを聞いたのは次の日の金曜日。クラスの話は、もうこればかり。

みんな、特別な友だちに来てもらうとか言ってたな。ただの友達はあまり呼ばないみたい。パーティだけじゃなくて、その前の礼拝から一緒にいないといけないから。男の子は、退屈しちゃうよね。

わたしは仕方ないからパパにお願いするつもりだったんだけど、その日はお仕事でいないって言われて、それで、MAHO堂でちょっと考えてたのが昨日のこと。ちようど、とびらの向こうに来てたももちゃんに、思わず泣きついちゃったのよね。

それにしても。

「もともとは、玉木さんがいけないのよ。」

『あら、藤原さんには、ちゃあんとお相手がありますのよ』なんて言うから」

それ聞いて、クラスみんな、調査に行くなんて言い出すんだもの。

これじゃあ、河原へまさるくんに会いに行くこともできないわ。

「そう言わないノ」

ももちゃんの声が聞こえてきた。なんだか、口の中だけで笑ってるみたい。苦笑い。かしら？

でも、玉木さんって、むかしから

「玉木さんの Christmas Card ってネ、みんなより先二届いたんだヨ」

え？玉木さんが!?

「きつト、はづきちゃんに Boy Friend なんているわけない、ッテ決め付けられてるの、見てられなかつたんだヨ」

あ！

「ご、ごめんなさいっ」

「いいヨ。むかしはいろんなことあつたつて、聞いてるから」

ああ。なんだかすごく恥ずかしい。そうよね。玉木さんだつて、同じ美空小出身の仲間なんだもの。

「ネ、はづきちゃん」

あら？ なんだかいきなり真剣な声だわ。

「なに？」

「わたしモ友だちだけどサ、どれみちゃんが近くにイルじゃナイ。なんで相談しないノ？」

そう、ね。それは、そう思うわよね。

「カレン女学院の子はね、礼拝とパーティで、25日が——クリスマスがつぶれちゃうのよ。どれみちゃんの方のパーティにも行かないくせに、わたしたちのパーティの相談なんて」

「そっかア」

ポーン

柱時計のチャイムが鳴った。ああ、もうこんな時間だわ。

「ももちゃん、ごめんね。わたし、もう学校行かないゃ」

「うん。それじゃア、また明日ネ」

とびらの向こうで、トコトコって足音が遠くなくて。さあ、わたしも立ち上がって、行かなくちゃ。

でも、MAHO堂のとびらにカギをかけてたら、ついでに口からこぼれちゃった。

「明日には、なにか変わってるといいな」

夜のMAHO堂。マジョモンローの写真だけが、わたしを見てる。

とびらの向こうにはづきちゃんの気配がしなくなっ

てからも、わたしはとびらの前にすわってた。

まだ、人が来るんだもんね。

コンコン

ほら、来た来た。

「どれみちゃん？」

「うん。でさあ どうだった？」

パタン

「ふう」

自分の部屋に入ってとびら閉めたら、おもわずその場にぺたん、って座り込んだ。じゃった。

きょうも一日、いろいろ言われたな。

やっぱり、どうしても誰か誘わなくちゃいけないみたい。どうしたらいいんだろう？ お願いできる

男の子なんて、まさるくんしかいないわ。幼なじみだもの。

そ、そうよ。幼なじみなのよ。いっしょにパーティ行っちゃって、おかしくないわ。幼なじみなんだから。当たり前じゃない！

でも、まさるくんは？ わたしの学校のパーティに来て、なんて言ったら、どう思うかしら？

なんとか立ち上がって服を脱ぎ捨てたら、ポケットに細長いものがある。わたしはそれを鏡台の上に置いて、また着替えを続けた。

でも、目のすみっこに、あれが映ると、とたんに言われたこと、思い出しちゃうわ。

『な、まだ誘えてないの？』

制服ぬいで、ハンガーにかけて。

『もう、オクテナんだから そつだ！ だったら、これあげる』

普段着やめて、もうパジャマ着て。

『あんまりハデじゃないけど、はづきちゃんなら
ちよつどいい感じになるわよ?』

脱いだ制服にブラシをかけて。

『ホラ、それでき、上目づかいで誘ってみたら?』
それでも、やっぱり目がはなせない。

鏡台の前にすわって、それを手に取ってみる。う
すいピンクのリップクリーム。

ちよつと手の甲につけてみたら うん。ほとん
ど色ないわ。じゃ、ちよつとためしてみようかな?

くちびるの端から、リップをすつ、とつけてみた。
べつたりつかないように、そおつと、そおつと
うん。

鏡を見たら、なんだかそこだけ少し光ってる。

わたしの顔のなかで、くちびるだけが目立つちゃ
う。近くで見たくなくなるかな? そしたら顔が近づい
て、そして

え?あの?ええと やだ、もう!

「わたし、変なのかしら?」

次の日は23日で、学校はお休み。希望者のみの補
講も午後からだけど、やっぱり朝からMAHO室に
来て 恥ずかしいけど、きのこのこと、ももちゃ
んに話してみた。

「こついつときは、とびらが開かなくてよかった、っ
て思うわ。」

「変じゃないト思っヨ、べつに」

あら?言ってる途中で、クスクス笑いだしちゃっ
たわ。なに?

「あ、ゴメンネ。』べつに』って、矢田クンの口ぐせ
だったナ、って思っテ。はづきちゃんは、』べつに』
の意味、わかるんでシヨ?。」

「意味?」

何のことかしら。意味、って言われても

「矢田クンって口数少ないけど、はづきちゃんはな

9 とびらのむこうに

んだかわかつてるみたいだから」

そう　そうね。

「長い付き合いだから、なんとなく感じるのよ」

ホントに『なんとなく』としか言えないんだけど。

「まるで、こうやって話してるみたいだね」

ももちゃん、またクスクス笑ってる。

「見えないケド、はづきちゃんの顔、なんとなくわかるモン。はづきちゃん和矢田くんも、そんな感じなんだよ。きつ」

「そ、そうかしら？」

そうなのかもしれないわ。むかしから、ずうっとだから。しゃべらなくても、なんとなく　そう、なんとなく、でいつも通じちゃうから。

カタン、　パタパタ

軽い音がしたと思ったら、とびらの向こうでももちゃんが立ち上がる気配がした。

「あ、ゴメン。ベスが来たみたい。」

それじゃ、また明日ね」

わたしは小声でまたね、って言って、そのままじつとしてた。音たてちゃいけないものね。

とびらの向こうに、ももちゃんの気配がなくなっても、わたしはしばらくそのまますわってた。

「べつに、かあ　」

そう、ね。いろんな『べつに』があるわ。なんだか、わたし以外の人はわからないみたいだけど。

「べつに　べつにい　べつに　」

言いかたまねてみたけど、なんか違う。まさるくんの『べつに』

「　」

背中の中のクツシヨン、なんとなく目の前に持って来た。じゅつと見てたけど、軽く、きゅつ、って抱きしめてみる。あ、だんだん、あつたかくなってきた。

たわ。

「ひとだったら、抱きしめたときからあったかいのよね」

あら？や、やだ！なに言ってるのよ、わたしったらっつ！?

ぶんぶん振った手がなんだか軽いな、って思ってた。中のみたら、クッションがぺったんこになってた。中のスポンジ、ぜんぶまわりに飛び散ってる。

「あゝあ 補講行こつ。もう」

ふあ ねみい。

冬休みだったのに、なんで朝っぱらから、散歩なんてしてなきやいけねえんだ？

『いつも夕方にベット吹いててダメなんだから、朝吹いてみなよ』って、まったく単純なヤツだよ。そんなもんで、自分の曲ができたら苦労しねえや。

まあ、結局あいつの言う通りにしてんだから、おれも人のこと言えねえか。

しっかし、こんな時間に家の近くでベット吹くわけにもいかねえし、やることねえなあ。ん？あれ、巻機山んち——MAHO堂って言ったっけな——引っ越して空き家になったはずなのに、明かりついでるぞ？

ああ、消えた。だれか出てくるみたいだな。いつの間に戻って来たん なに!?

驚いたの気づかれないように、なんだか深く息吸ってから、おれは声かけた。

「よお、藤原あ」

その瞬間、ビクッ、てこつち向き直った。近くまで来てたのに、気づいてなかったのか。

「ま、まさるくん!？」

なんだ、こいつ。赤い顔して、目玉こぼれるくらいに見開きやがって。

「お、おは、おはよう」

「どうか、したのか？」

おれが言ったとたん、思いつきり首振りながら、

「う、ううん、なんでもないの。じゃ」

そう言うなり、走って行きやがった。コート姿に重そうなカバン持って、何度もコケそうになつてやがる。

「なんだ、あいつ？」

そういや、ここんと河原にも来なくなつちまつたっけ。てつきり忙しくなつただけだと思つてたけど。でも。

「あいつ、また笑つてねえな」

パタン ドサツ

部屋のとびら閉めたとたん、カバンが手から落ちちゃつた。なんだか、いつもより重いわ。

「あゝあ。補講なんて行くんじゃなかつたわ」

制服のままベッドのすみに腰をおろして、ちよつと

顔上げたら、バイオリンのケースが目に入った。

そうね。ちよつと引いたら、気分も変わるかも。

ケースから出してる間も、やっぱりみんなの言葉、思ひ出しちゃう。

『藤原さんのお相手、意外だつたわよ』

わたしは頭振つた。いけないいけない。これじゃきのうと同じだわ。

バイオリン構えて、弦を調節して。

『なんか、つまんなそうな顔だつたわよね？』

ああ、だめだめ。バイオリンに集中しなくちゃ。

弓をそつとあてて、さん、はい。

『そうそう。トランペット持ったまんま、河原歩いていたわ。なんだか、へんな人よねえ』

バイオリンに、集中　っ！

「みんな、なんにもわかつてないんだからあつ!!」

キュポンッ！

え？あゝあ。おんぷちゃんを送ってくれたシャンメリーに弓が当たって、栓あいちゃった。もう、なにやってるのよ、わたしったら。

手近にあったタオルであたり拭いたけど、ビンの中にまだ半分以上残ってるわ。しょうがないわね。一日早いけど、飲んじゃおうかな。

水差しのコップにこぼこぼって注いで、くいっと飲んでみた。きれいだけど、パーティの飲み物だから、ひとりつきりだとさみしいわね。あ、でもなんだか、あつたかくなってきたわ。

ラベル見てみたら　ふふ　ちょっとだけ、おさけ入ってたみたい。

ふうう。きもちいい。パパが酔っ払っっちゃうの、ちょっとだけわかる気がするな。

「まさるくん。はい、一杯、って　きゃあ！ちがうのちがうの！そうじゃなくなっつてっ!!」

ああ、もう！

わたししたら、なに言ってるのよっつ!!!

一日たって、また、朝が来た。

「ふあ　ううう。さみい」

口あけるだけで、体がふるえちまつ。

こんな時間に、あいつがひとりで公園に行ってるだつてえ？なに考えてやがんだ。

昨日の夜に来たメールには、なんだかいろいろ書いてあった。カレンのクリスマスパーティのこととか、このままだと、クラスの中であいつだけ、ひとりで行かなきゃならないとか。

ああ、つたく！どうしておれが悩まなきゃいけないんだよ。

だいたい、あいつが笑わねえからいけねんだ。考えごとすると、昨日のあの顔つかんじまって、曲に

集中なんてできやしねえ。まったく。

「はあ やっぱ、ちょっと行ってみっか」

「やっぱり、わたし変！絶対、変!!」

この何日か、なに考えてても、しばらくすると変なことになっちゃう。もう、どうすればいいのか、ぜんぜんわかんないっ！

「だから、変じゃナイってバ」

だまって聞いてくれてたももちゃんが、ぼそつと言った。ごめんね。ももちゃんに言ってもしょうがないのに。

「幼なじみってわたしにはいないケド、いちばん古い友だちでシヨ？バカにされたら、怒るの当たり前だよ」

それは うん、それは、そうなんだけど。

「でも、だからっていきなりヘンなこと考えちゃう

なんて」

「近くにいたら、ホントにおシャクしてあげられるのにネ」

え？

「ネ、はづきちゃん？」

ももちゃんが、すうつと息すって言った。

「やっパリ、はづきちゃんと矢田クンって、とびらの両側にいルんだと思うヨ」

とびら？ そついえば、きのうもそんなこと言ってたわね。

「とびらの両側で、みくんなわかつちゃうのもいいけどサ。ちょっととびら開けたら、もっとよくわかるんじゃないかな？」

とびらを、開ける？ わたしと、まさるくんの、とびら

「そんなの、どうしたらいいのかしら」

わたしには、まるつきりわらないわ。まさるくんとの間にとびらがあるなんて。まして、ひらくだ

なんて。

「カンタンだよ。笑ったらいいだけだモン」

え!?

「はづぎちゃんって、うわべダケで笑えないから。笑ったらキツト、みんながわかってくれるヨ」

そう かしら? ももちゃんの思い込みじゃないかな? なんか最近、あいそ笑いばかりの気がするわ。わたし。

「そういえばサ、はづぎチャン、この下」すつと MAHO堂にばかり来てるじゃない?」

え!? あ、そ、そうね。いけない。話の途中なのに、考え込んでしまったみたい。

「相談にはいつでも乗るケド、ちょっと外の空気吸って見たら? たしか、町を見渡せる公園ってあったよネ。あそこなんてドウ?」

そう、たしかにそうだね。ももちゃんと話しても考え込んでしまうなんて ちよつと、行ってみよう。

パタン、って表のドアを閉めた音がしたけど、もうちよつと待ってみた。はづぎちゃんに気づかれちゃいけないもんね。

「おい、もついいよあ!」

あ。とびらの向こうに、元気な声。どれみちゃんだ。

「はづぎちゃん、もう行ったんか?」

あれ? また新しい声。聞いてたんだ。

「あいちゃん、Hello」

「あいちゃんも来てたんだ。ひさしぶりー」

トン、って音がして、背中がまたあつたかくなつた。あいちゃんが、とびらにもたれたんだ。大阪にある、マジョリードさんがむかし作ったMAHO堂で。「ももちゃん演技派やなあ。あれやったら、あたしかて公園いつてまっつで」

へへへ。それはもう、おんぶちゃん直伝だもんね。「んで、矢田くんの方は?」

「も、バッチリだよ。いまごろ公園ついでるころ」

うん。さっすが、はづきちゃんの幼なじみ

「そつか。ほな、おんぶちゃんのシャンメリーで乾杯や。本人は来られへんから三人やけど　まあ、ええやる」

わたしは思わず吹き出しちゃった。そういうあいちゃん、いちばん残念そつだよ。

「それじゃ、いくヨ！　はづきちゃん公認カップル作戦の成功を祝つてエ、せえ、ノー！」

ポーンツ！　っていい音が、とびらのむこうからも響いてきた。

「ヨメリー・クリスマス！」

MAHO堂から出て、わたしは公園にやってきた。

うん。もちちゃんの言う通りだわ。高いところから見ると、ほんとに気分がよくなる。ちよこつ

とだけでも。

とびらを、開ける　かあ。

これでいいかわからないけど、ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ、やってみようかな？

わたしは、すうつと息を吸って、思い切り声を出してみた。

「やだまさるの、ばかあ〜っ！」

うん。もちよつとだけ。せえ、の。

「『べつに』だけで、なんでも通じるなんて、思うな〜っ!!」

ふう。なんだか、心が少し軽くなったみたい。

でも、これが精いっぱいね。今のわたしには――

「ふじわらはづきの、あほー」

え!?

「言いたいことあんなら、逃げねえで言ってみろー」

この声、後ろ？

振り向いたら、トランペット持ったまさるくんが立ってた。

「ほら、言ってみるよ。ちゃんと聞いてやるから」
え？あの よ、よあつしー！

「あした、わたしに付き合ってくれないっつ！？」

両手をおもいつきり握りしめて、全身の力で、なんとか、言えたあ。はあ。もう、あとどうなってもいいわ。

「そんなでさえ声出さなくても聞こえてるよ。

わかった」

え？

「カレン女学院のパーティだろ？ いっしょに行つてやるよ」

行く、行くって

「い、いいの？ 礼拝も出なくちゃいけないのよ？」

「誕生日を祝いもしねえで騒がれたら、そりゃキリストだって気分悪いよな」

「み、みんなから見られるのよ？」

「見たけりゃ見ればいいさ。悪いことしてるわけじゃねえし」

「でも、でもっ」

「いっしょに行きたくない、なら べつに」

あ、この『べつに』

「うん、うん、いやじゃないわー！」

「行きたいんだ。『行つてくれる』んじゃなくて、わたしと行きたいんだわ！ うん。もう、自信過剰って言われてもいい！！

「わたしは、まさるくんがいいの！ いっしょに行つて。お願いっ！！」

うなずいてるまさるくん見てたら、本当にとびらが開いたみたい。自然に笑顔になつてきちゃう。

ももちゃんの言つてた、うわべじゃない笑顔。伝わるかしら？ 伝わるわよね。まさるくんなら。

おんぶちゃんが送ってくれたシャンメリー。なんや、ちよい酒はいつてるみたいやなあ。飲んでたら

あつたこうなつてきたわ。

「ええっ!? ってことは、クラス全員共犯なのぉ?」

ん? どれみちゃん、なに驚いてんのや?

「クラスどこやないで。学校丸ごと共犯やて」

最初に聞きつけたんは、おんぶちゃんやつたからなあ。どれみちゃんには隠しとつたんかな。

「カレンでは、毎年だれか一組選んで、くつつけてるみたいだよ」

はは。知らんかったんは、どれみちゃんだけや。

まあ、しゃあないか。

「ペアの相手、ホントは女の子でもいい、なんて知つたら、はづきちゃん怒るよねえ」

ほんま、頭のええ学校はやることわからんわ。先生まで公認やて。ミッシヨン系の学校なんに、ええんやろか?

「終わりよければ、すべてOK。ネ♡」

ももちゃんが、けらけら笑うてる。なんや、いつもよりテンション高いなあ。

「でもネ、玉木サンの手紙に書いてあつたヨ
ヤッ」

ほんまは酒やないやろな、これ?

手の中のシャンメリー、匂いかいでたら、ももちゃんが嬉しそうに言うてた。

「選ばれたカップル、絶対こわれないんだっテ♡」

まさるくんに、あしたの時間のこと話したら、いきなりトランペット吹きはじめた。

てつきり、いつものキラキラ星だと思つたんだけど、違つわ。

音を試しながら、すっごく短かつたけど。でも、あつたくなる曲。

「なあに、その曲?」

トランペットをおろして、まだピストン押ししてる。なんだか、驚いてるみたい。

「ん。顔見てたら、なんか、吹きたくなつたんだ」
顔って、わたしの？ あ、しまった、って顔して、むこう向いちゃったわ。

「なあ、たまにでいいから、河原来てくれよ」
そば向いたまま、まさるくんが言った。すう、つと息吸って。

「できたら、そばで笑ってほしいんだ。

おれの、ために。」

うん、って大きくうなずいたら、真つ赤な顔がうしろ向いた。

まさるくんのとびらも開いたんだ、なんて思った
ら うぬほれすぎ、かな？

—おしまい—

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしく願いいたします。

追記：私の書く文は、条件付きですがコピー可です。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

奥付

発行 酒処 金井亭

発行日 2003年12月29日